# 89　司馬凌海――日本人執刀最初の病理解剖

髙橋　昭
名古屋大学名誉教授

司馬凌海（1839–1879）は，明治 9 年（1876）5 月に愛知県から招聘され名古屋に着任した．同年 7 月には，愛知県の山間僻地へ往診し，現地で特志病理解剖を行った．日本人が執刀した最初の病理解剖として知られる．その経緯，患者氏名，墓石などについてこれまで不正確ないし不明の点が少なくなかった．ここに最近明らかにし得たことを報告する．

## 1. 愛知県への雇入

愛知県が司馬凌海を雇用したのは，明治 9 年 5 月 16 日付けで，「公立病院，公立医学講習場」（名古屋大学医学部，同附属病院の前身）に「副教師兼訳官」としての採用であった．同時にオーストリアから教師として Albrecht von Roretz が着任した．「愛知県布達　第百三号：愛知県布達類聚　明治 9・10 年 239-240 頁］．

## 2. 愛知県北設楽郡津具への往診

愛知県公立病院が編集発行した公式記録『愛知県公立病院及醫學校第一報告．明治 6 年至同 13 年』（後藤新平が作成責任者）には，「7 月．本縣設樂郡上津具村農芦澤金藏妻志満（変体仮名）ナル者子宮病ノ爲メニ診ヲ乞ヒ來ル．仍テ副教師司馬凌海之ヲ派出セシム」と記載されている．また，患者は凌海の到着前に死亡しており，生前の症候から子宮外妊娠と診断，親族の希望により剖検し，卵管中の妊孕を証明したことが記されている．

当時の愛知県知事は安場保和（1835–1899）であった．安場は熊本の出身で，幕末維新期の思想家であった横井小楠から薫陶を受け，広い視野をもっていた．安場が胆沢県（現岩手県水沢）在任当時その才を見出した後藤新平とともに愛知県に着任し，両人が愛知県公立病院・公立医学所の発展に寄与した功績は大きいものがある．安場知事は，凌海の往診の意義を理解し，これを積極的に支援したものと考えられる．

## 3. 患者と家族の氏名，歿年月日

ご遺族のご了解とご協力により，戸籍上の記載をご教示頂いた．これによれば「上津具村百四十二番地，芦沢金作妻し夊（？変体仮名），九年七月三日病死」とある．従来紹介されてきた芦澤金藏は芦沢金作が正しいことが判明し，また患者本人の氏名，および死亡年月日も確定できた．

## 4. 墓石

墓石は患者の住居であった現在の愛知県北設楽郡設楽町津具字釜石 7 番地に現存する．

高さ 62 cm，幅 13 cm，南向きの正面には「奇癥妙果禅定尼」，右側面には「愛知県建立」，左側面には「明治九年七月三日」とある．かなり風化が進んでいる．愛知県が墓石を建立したことは，特志剖検に報いる意味があったと考えられる．戒名も愛知県が用意したと伝えられる．

## 5. 司馬凌海の往診の経緯

愛知県職員であった凌海の往診の依頼者や往診を許可した責任者については，従来明らかでなかった．当時の津具在住の医師が往診を依頼した可能性が考えられる．最近，『山崎珉平昔談』（佐々木克子編，山崎譲一発行，昭和 16 年）という個人出版物を入手した．本書によると，凌海が津具へ往診した明治 9 年頃に珉平の父山崎謙吾は，医師として活躍しており，また津具の「里正」（村長）を兼任していた．謙吾は新城の杉浦玄達のもとで蘭方医学を学んだことがある．一方，謙吾の長男の珉平は，愛知県三河（現在の愛知県碧南市鷲塚町 3-393）にあった「蜜蜂義塾」で医学を近藤坦平から学んでいた時期でもある．松本良順の弟子に近藤　鼎（三河国碧海郡吉浜，近藤坦平と同一人?）があり［鈴木要吾：蘭學全盛時代と蘭疇の生涯．昭和 8 年］，良順，凌海，近藤坦平らの人脈を通して凌海に往診を依頼したことが考えられる．

津具は，愛知県の東北端に近く，県下最高峰茶臼山（標高 1,415 m）の南麓にある山間の寒村であった．凌海は，名古屋から駕篭に乗り，飯田街道を通り，2 泊 3 日を要して津具まで往診に赴いた．このような僻地から往診を依頼された凌海が，これを実行し，日本人執刀の最初の病理解剖を行った史実を明らかにすることは医史学的に重要である．